桜井をつなぐ人 vol.55

建築会社社長
瀧川 伸（たきがわ しん）さん

「不易流行」の精神を胸に、未来を見据えて新耐震工法を開発する。

瀧川寺社建築は、歴史的建造物の復元や、国宝・重要文化財の修理工事を請け負っており、全国でも珍しい宮大工を正社員とする建築会社。社長の瀧川伸さんは、設計士として若くから県内外を問わず数々の有名寺社の建築に携わってきた。

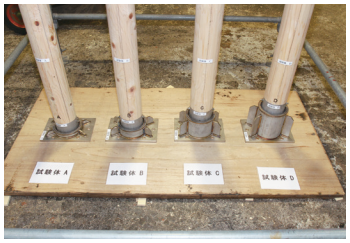
瀧川さんが今一番力を入れているのは、昨今の建築物に、伝統ある木造建築の開放的空間を取り戻すこと。阪神淡路大震災以降、日本の建築は、耐震性を高めるため室内に耐力壁を設ける方法が主流となり、空間が閉鎖的になっている。伝統的な木造建築の良さである「開放的な空間」が失われつつあると感じた瀧川さんは、安全で開放的な木造建築を目指し、技術開発を進める。

壁を減らして耐震性を高めるには、どうすればよいか。考え抜いた末たどり着いた結論が「何百年と持つ、太く強い掘立柱（ほったてばしら）の開発」だった。そこで着目したのが、従来の土を掘って柱を埋める工法では、柱の地面と接している部分の傷みが激しいという点。腐りにくい柱を立てるため、柱の根元をステンレス金物で覆って埋めることで改良し、柱を地面に触れさせずに支える工法を編み出した。安全性や耐震強度を法基準に則った確実なものとするため、有名大学や専門機関と協力して実験を重ね、太い柱を地面に直径と同程度の深さ埋め込むだけで、耐力壁以上の耐震性を保つ「令和の掘立柱工法」を開発中だ。

通気性も良いこの建築技術。新型コロナウイルス感染症の影響で、「密」を避けることを重視する今後の社会様式に合うのではないかと考え、「第2波・3波の中の開催も予想される大阪万博の、イベント会場の建築のお手伝いができれば」と話す。

目標に向かって突き進む瀧川さん。普段から「不易流行」の精神を大切にしている。基軸となる事柄は、ぶれずにきちんと守っていくと同時に、安全性をより高めるため、新しい技術を取り入れることも、おろそかにしない。この精神を軸に、歴史ある邪馬台国の地とされる桜井から「令和の掘立柱工法」を全国に発信していきたいと語る。

▲柱の根元が地面に触れない工法


▲試行錯誤中の「令和の掘立柱工法」

▲瀧川さんが出仕した上棟式